

第1回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和2年7月29日（水）9時30分～15時

会場：秋田県生涯学習センター 3階 講堂

参加者：80名（うち市町村等から62名）

今回は「子どもの発達過程の理解と保護者の援助」「家庭教育調査からみえる現状」「学校・家庭・地域連携総合推進事業とチームへの期待」という3つの講話を基に、自分の市町村で今後取り組みたいことを協議しました。参加者は、家庭教育支援チームの役割、地域理解、連携・協働等についての重要性を理解し、まずできることから「余裕をもって」と臨む姿が見られました。



【午前の部① 講話・演習】

秋田大学教育文化学部の**山名 裕子 教授**ははじめに、発達過程を理解するときには、成長や発育だけではなく、さまざまな質的な変化を多面的に捉えることが大切であると話されました。その捉え方は、子どもの発達過程においてちがいがあった境目に注目し、状況や文脈、つまりその子にとっての意味あるものは何であったかを考えるという把握の仕方です。

次に参加者は、2歳児が保育園の手洗い場で水遊びをし始める動画を視聴しました。子どもの自由な経験を保障し、子どもにとっての行為の意味を理解する重要性は分かっているながらも、園児がどんどんエスカレートしていく場面に、参加者はたまたま止めさせなくなったと意思表示。そこで先生は、子どもの行為を「受け入れる」ことは難しくても自我を「受け止める」ことはできると話し、それが安心感や信頼を得ることにつながると強調されました。「受け止めるためには、心に余裕をもつことが肝心ですね」そう優しく語りかけられると、参加者は大きく頷き納得していました。

最後に先生は「ほめる」より「喜ぶ」ことを大切にしてほしいとまとめました。「教育的ではない大人」の存在を目指し、ゆったりとした時間や空間を保障していくことが望ましいというアドバイスは、家庭教育支援チームが目指す役割そのものでした。

【午前の部② 講話】

当センターの**長谷川 工 主任社会教育主事**が、『令和元年度「家庭教育に関する調査」グラフでみる秋田の家庭教育』に基づいて、平成24年度に実施した前回調査と比較しながらその現状を話しました。ポイントの差に開きがある項目をみていくと、子どもを取り巻く環境や子育てに関する保護者の思いや悩みが浮かび上がってきました。特に、保護者や子どもが様々な場面でインターネットに頼る傾向が強くなっていることに触れ、それは必ずしも悪い影響だけを与えるものではないことと、それが万能ではないことを補説しました。地域のつながりが希薄化している現状も伺え、参加者は、子育てを取り巻く環境の変化と影響をデータ上からも強く感じていました。



【午後の部 講話・協議】



当センターの**菊地 智 社会教育主事**が、家庭教育支援チームの支援モデルや学校・家庭・地域連携総合推進事業について、チームへの期待も込めて話しました。家庭教育支援チームの活動は、目標やビジョンを共有した上で、緩やかなネットワークを形成しながら地域学校協働活動を一体的に進められるという体制を知り、参加者は「キャッチする・きく・つなぐ」というチームの役割を生かすことができると確認していました。

最後に、3つの講話を受けて、自分の市町村で今後取り組みたいことを話し合いました。グループ協議では、同じ市町村の方を配っていたので、地域との信頼づくりや支援のタイミング等、地域の実情に直結する話題が飛び交い、考えを改めて共有し合う機会となりました。

【参加者の声】（抜粋）

- ・保護者、子どもに対して私たちは「子どものことについて話をしたくなるような存在」であるのだろうかと思いを改めて考える機会となった。支援をしていくため「喜び合える」時間を意識したい。
- ・7年を経て家庭教育の意義がどのように変化しているのかが良く分かった。ネットの影響に対して、どのような対応をすればよいのか考えていきたい。
- ・地域で子どもの育成が非常に大切であることを痛感する。大事な推進事業であり今こそ必要であると思う。